

ナイジェリアにおける ペンテコステ＝カリスマ運動 の展開

落合雄彦

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。
(使徒の働き 2章1-4節)

ロンドン大学 (SOAS) のポール・ギフォードは、アフリカにおけるキリスト教の近年の動向について考察した論文のなかで、「(1980年代における) アフリカのキリスト教の最もめざましい展開は、はるかに詳細に記録されてきたラテンアメリカの場合と似た、新しい諸教会の雨後の筈的自己増殖であった」と述べている (Paul Gifford, "Some Recent Developments in African Christianity," *African Affairs*, Vol.93, No.373, 1994)。

ラテンアメリカやアフリカでは、過去数十年間にわたって、主にプロテスタントの潮流に属する新しいタイプの大小さまざまな教会や超教派的組織が、分裂と成長を活発に繰り返しながら、急速

な自己増殖を遂げてきた。カトリックや長老派といった主流派教会とは異なるこうした新しいキリスト教運動の潮流は、きわめて複雑かつ多様であり、それらを一つの同質的な運動として捉えて考察することは到底不可能であろう。

そこで本稿では、こうした新しい多様なキリスト教の潮流のうち、特にペンテコステ＝カリスマ運動という範疇で捉えうる運動にのみ注目し、ナイジェリアにおけるその展開を考察していきたい。

1 ペンテコステ運動とカリスマ運動

ペンテコステとは、ギリシャ語のペンテ（5）とコス（50番目の）を語源とする言葉であり、もともとユダヤ教の五旬節を意味している。本文冒頭に引用したとおり、新約聖書のなかには、イエスの死後、ユダヤ人の過ぎ越しの祭りから数えて50日目の五旬節（ペンテコステ）の日に、イエスの弟子たちが集まって祈っていると、そこに聖霊が下り、弟子たちがさまざまな国の言葉で話し出したという記事がみられる。この聖書の箇所から、今日のキリスト教では、ペンテコステを聖霊降臨日とも

呼んでいる。

こうした聖書記事に名称の由来をもつペンテコステ運動とは、もともと20世紀初頭にアメリカ西海岸を中心に起きた一種のリバイバル運動、すなわち信仰覚醒運動のことである。ペンテコステ運動では、信仰者個人が聖霊によるバプテスマ(洗礼)を実際に体験し、霊的に生まれ変わること(ボーン・アゲイン)が重視される。また、霊的な再生の結果として、癒しや異言(聖霊の顕現によって人間には意味不明な言葉を話す現象)といった非日常的な業を行なうことが強調されている。

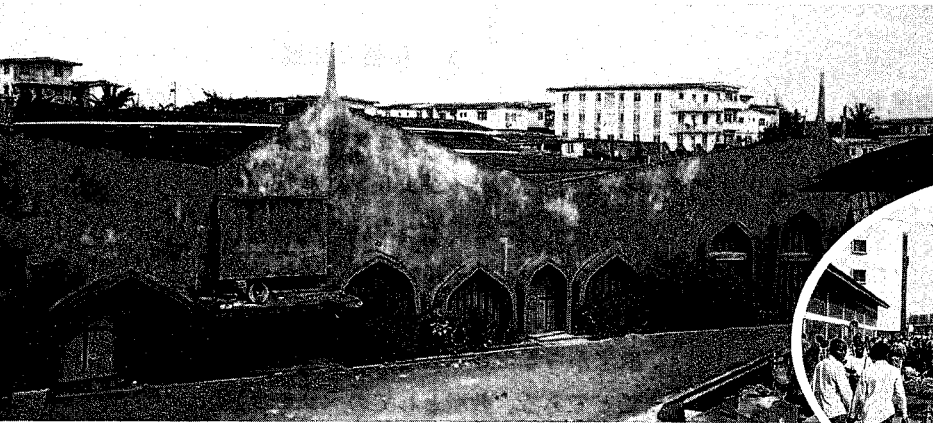
他方、現代のキリスト教カリスマ運動は、主に1960年代以降、アメリカやイギリスを中心に発展してきた運動である。カリスマというと、すぐに私たちはマックス・ウェーバーを想起しがちであるが、もともとキリスト教でいうカリスマとは、神の賜物のことであり、特に神の賜物としての聖霊のバプテスマを意味している。したがって、キリスト教カリスマ運動とは、ウェーバー的な意味での「カリスマ性を帯びた指導者とそれに全面的に従う人々の群れ」といったイメージのものではなく、むしろそれは、神の賜物(カリスマ)としての霊的なバプテスマと再生の体験を重視する信仰覚醒運動、あるいは個人の霊的体験に基づく既成教会の刷新運動のことなのである。

前者のペンテコステ運動と後者のカリスマ運動とは、聖霊によるバプテスマを強調するという点で酷似している。両者の相違は、ペンテコステ運動がプロテスタントの伝統のなかで教団を形成し、教派的傾向を強めていったのに対して、カリスマ運動が教団形成を必ずしも志向しない超教派的運動として、カトリックを含む既成教会内部においても発展してきたという点にある。

2 伝播と発展

教派としてのペンテコステ派が欧米の宣教師によって初めてナイジェリアにもたらされたのは、1920年代のことであった。しかし、ペンテコステ派がナイジェリアにおいて急成長を遂げるようになるのは、超教派的運動としてのカリスマ運動が欧米からもたらされるようになった70年代以降のことである。教派としてのペンテコステ派は、異言、癒し、奇蹟といった点で多くの共通性を有する超教派的なカリスマ運動に刺激され、あるいはそれといわば合流することによって、ビアフラ内戦からの戦後復興を目指しつつあった70年代以降のナイジェリア社会において急成長を遂げることとなった。

こうしたナイジェリアのペンテコステ=カリスマ運動には大小さまざまな教団やグループがあるが、大きく分けて、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド(Assemblies of God)やフォースクエア・ゴスペル(Foursquare Gospel)のような欧米から移植されたグループと、そこから分離して形成されたナイジェリア独自のグループとに分類することができる。いうまでもなく、欧米から移植された教会は、欧米のペンテコステ派教会の物心両面における支援を原動力としてナイジェリア社会で発展してきた。これに対して、ナイジェリア独自の教会の多くは、1970年代、当時ペンテコステ派に属していた敬虔なクリスチャンの大学生や大学教員が、キャンパス内に組織した超教派的な聖書研究会やフェローシップとして始まったのである。すなわち、今日みられるナイジェリア独自のペンテコステ=カリスマ運動の一つの起源は、知的エリートたちによる70年代のキャンパス伝道にあったといえよう。そして、それがやがて教会へと発展し、テレビやラジオといったマスメディア、ト



ラゴスのバガダ地区にあるディーパー・ライフ聖書教会。簡略質素な外観の礼拝堂である。1980年代には、日曜日の礼拝がこの会堂で5回に分けて行なわれ、一時合わせて約5万人の出席者があったといわれている。しかし、現在では、多くの支部教会がラゴス市内各地に設立され、分散化が図られている。切り込み写真は、ディーパー・ライフが1997年12月に開催した3泊4日の修養会の風景（最終日）。ラゴス郊外のアヨボにある国際聖書研修センター（ディーパー・ライフの研修施設）で開催された。修養会の正確な参加者数は定かではないが、同センターの大集会場は約4万人を収容できるといわれており、筆者の眼にも、参加者数は数万人を下らないようにみえた。ディーパー・ライフは、毎年イースターと12月の時期にこうした修養会をそれぞれ数回に分けて開催している。修養会の期間中、参加者は、日常の雑踏を離れて、聖書研究や祈禱に専心する日々を送る。

ラクト（小冊子）、説教テープ、クルセード（大衆集会）等を用いた大々的な宣教活動によって急速に教勢を拡大してきたのである。

そうしたナイジェリア独自のペンテコステ＝カリスマ運動の代表例としては、リディームド・クリスチャン・チャーチ・オブ・ゴッド（Redeemed Christian Church of God）、チャーチ・オブ・ゴッド・ミッション・インターナショナル・インコーポレーティッド（Church of God Mission International Incorporated）、そして、以下に詳述するディーパー・ライフ（Deeper Life）などが挙げられる。

3 ディーパー・ライフ

ディーパー・ライフは、ウィリアム・クミュイ（William F. Kumuyi）という人物が創始・主導する、ナイジェリアの代表的なペンテコステ＝カリスマ運動である。しかし、厳密に言えば、ディーパー・ライフという名称の組織は存在しておらず、クミュイが創設した超教派的組織としてのディー

パー・クリスチャン・ライフ・ミニストリー（Deeper Christian Life Ministry）と、そこから派生した教団であるディーパー・ライフ聖書教会（Deeper Life Bible Church）という二つの組織を総称してディーパー・ライフと呼んでいる。

クミュイは、22歳のときにペンテコステ派教会で霊的な再生を体験した。そして、1973年、ラゴス大学の数学講師時代にクリスチャン学生ら15名ほどを自宅に集めて小さな聖書研究会を始め、その後急速に支持者を集めるようになっていった。75年12月にラゴスの教員養成コレッジで開催されたディーパー・ライフの初めての修養会には、実に1500人の参加者があったといわれている。クミュイは、キャンパス内における自らの活動をあくまでも既成教会の活動を支援するためのものと位置づけ、新たに彼独自の教会や教団を形成する意志を当初はまったく有していなかったという。しかし、ディーパー・ライフに信徒を奪われたと感じる既成教会からの反発や支持者からの要望もあって、クミュイは、ついに82年、独自の教会であ

るディーパー・ライフ聖書教会を創設するにいたった。現在、ディーパー・ライフ聖書教会は、ナイジェリア国内ばかりか、ケニア、ザンビア、ガーナといった他のアフリカ諸国にも支部教会を有し、ナイジェリアを中心に約20万人のメンバーを抱える一大教団にまで成長している。

ラゴスにあるディーパー・ライフの本部には、1万2000人を収容できる礼拝堂（写真）があり、総主監であるクミュイの指導のもと、毎週日曜日に主日礼拝、月曜日に聖書研究会、木曜日に奇蹟・リバイバルアワーがそれぞれ開催されている。筆者はディーパー・ライフの主日礼拝に出席したことがある。礼拝が始まる午前8時半ともなると、礼拝堂は夥しい数の人々で埋め尽くされ、礼拝はその後約3時間にもわたって延々と続けられた。礼拝中に出席者全員が起立して行なう祈禱では、異言を語る者も散見された。しかし、アフリカ的な音楽やダンス等はまったくといってよいほどみられず、むしろその礼拝は、スポットライトによる照明、ビデオカメラによる撮影、同時通訳、大規模なオーケストラと聖歌隊による賛美など、どこかアメリカのテレビ説教師による礼拝風景を彷彿とさせるものであった。

ディーパー・ライフにおける信仰生活のなかで最も重視されている活動は聖書研究である。信徒は、『聖句探究』というディーパー・ライフ独自の手引書を用いながら熱心に聖書を学ぶ。しかし、ナイジェリアが深刻な経済危機に直面するようになった1980年代前半以降、クミュイは、聖書研究に加えて、癒しと奇蹟を次第に強調するようになってきた。そして、それまで毎週木曜日に開かれていた伝道訓練集会を、前述した奇蹟・リバイバルアワーへと改めたり、病氣治し、金銭問題の解決、悪霊からの解放等を唱えて、ナイジェリア各地で大規模な奇蹟のクルセードを展開するように

なった。また、現在ディーパー・ライフは、「私たちの時代の望み」と題する55分間のラジオ伝道番組を放送しているが、そのリスナーからは、「番組中に不治の病から奇蹟的に癒された」とか、「長年苦しめられた悪霊から解放された」といった、癒しと奇蹟に関する投書が数多く寄せられるようになってきているという。

4 おわりに

ペンテコステ＝カリスマ運動は、前述したとおり、霊的なバプテスマという個人的体験を重視するパーソナルな信仰覚醒運動であるとともに、病・貧・争やささまざまな心の問題を抱える人々に対してより明確な解決策を提示し、彼らをいわば内側からエンパワーメントすることによって、ナイジェリア社会のなかで急成長を遂げてきた。

また、ペンテコステ＝カリスマ運動は、もともと外来の宗教運動でありながら、ナイジェリア社会の変化やニーズに敏感に反応するとともに、その文化社会的要素を集会形式、教義、教会生活のなかに柔軟に取り入れることによって、ローカルな運動としてのオーナーシップを獲得し、ナイジェリア社会に広く受容されてきたといえる。

そしてさらに、ナイジェリアのペンテコステ＝カリスマ運動は、いまや独自の宣教師を欧米諸国や他のアフリカ諸国に派遣したり、欧米、ラテンアメリカ、アジアにおける他のペンテコステ派やカリスマ運動と相互に影響し合うなど、まさにグローバルな展開をみせつつある。

ナイジェリアのペンテコステ＝カリスマ運動の展開には、こうしたパーソナル、ローカル、グローバルという少なくとも三つのレベルのダイナミズムが内包されているように思われる。

（おちあい・たけひこ／敬愛大学）